

北支

莊里口（山東省）の戦闘

千葉県 竹原 仲次

私は昭和十八年二月一日東部第八部隊に入隊し、二月八日北支那派遣軍幹部部隊の單県警備隊に勤務した。第三十二師団楓部隊の第二大隊があった所だが南方移動に伴い、代わって警備に当たったのである。平和の地に秋更けて民衆が冬支度に大重でいました。異国といつても労働光景は日本と何等変わらない。

我々は日々訓練に精進して、嫡敵必ず近き将来撃滅せんとの誓いのもと、日課は剣術によって忍と耐を活用し俯仰天地に恥ぬよう努力した。

昭和十九年十一月末、日米戦争はいよいよ酷しさを増し、戦況も芳しくなかつたけれど我が支那大陸においては何等変わりなかつた。当時、我々の伊藤大隊は陣域・寿張方面で第五号作戦が行われていました。各中隊が参加し昼夜を問わず戦闘が継続され、村越少尉以下四九名参加した。

中隊は兵力を分割し四七名は軍令により望樓の建設に連日連夜の作業をしましたが、多忙の中でも和氣藹々たるものがあつた。

当時、單県周辺には約四万の八路軍がおり、ゲリラ戦術を以つて次々と分屯隊を陥落した。

第二大隊の兵力は八〇〇名近いが、宇賀神中隊一〇〇余名が配属された。装備も第一線級から第二戦級に低下したので、四万の敵に対する兵力差は大きく、敵

の宣伝も派手であった。

討伐隊を送って数ヵ月、県域付近の状況は手にとるよう判った。情報によると二十二日以来、新家楼（七路軍）を攻略せる兵力二千余名の激戦は一昼夜にわたって展開された。

芳桂集の分屯隊には十数名が派遣され、華北交通路の一五キロの地点の任務についた。

新家楼二キロの地点には有力な八路軍が進撃し、我が芳桂集の危機は一段と高まり、敵はその余力を以つて県域を攻略せんと大々的に発表していた。二十二日の夜間戦闘により戦いの波及は増大するばかりで不安だった。

その頃、中隊長は身体の異常を来たし就寝中で、明日の不安を感じるものがあつた。床にいたが依然として不安は止まず、手榴弾の炸裂音が何んとなく胸をさわがせるような響きであつた。城内外の雑音も交じり、なかなか眠りに就けず、数回寝返りの後、眠りにつくような状態であつた。

長い眠りの後二十四日の朝が訪れた、本日も作業の

継続である。一ヵ月余りの望楼建設で陰口を漏らす兵も多く、数十名のクーリーを監視することは大変なことであつた。

丁度十時三十分頃、作業中突然事務所前に集合がかり、どうやら編成らしい、長い籠城のせい己自身からも出動を考えた。次々名前を読み上げるが、待てど暮らせど呼ばれず編成外である。何んとなく残念のような気がしてならなかつたが、私は正規の重機関銃の四番射手であり、分隊長に替わる総ての条件が整つていた理由もあり、重機関銃が伴わぬ戦闘には参加しなかつた。

出発十二時三十分、携行品の指示あり出動準備に協力するのであつた。我が重機関銃隊から青木兵長、荒家上等兵、本吉一等兵の三名で小銃隊を編成される。十二時十分當庭集合、見送る我等兵士、宇賀神中隊長以下二五名、凜々しい出動姿であつた。

敵八路軍第九団、第十団の精鋭部隊は昨日新家楼（七路軍）の友軍を包围、目下激戦中で、その数三千有余名。敵は必勝を期して新家楼を陥落させ、以後芳桂集、

單県城を攻略せんとしている。当時、芳桂集には入江軍曹以下十二名の警備隊があり、芳桂集危しの報に接した。中隊長は芳桂集を救援せんとして、只今より出發する、と命令した。

出發に当たって

「第一分隊先兵、本隊の間隔五〇メートル、二分隊、指揮班、三分隊の順序とする、警戒は密に中隊の団結を守り最後の兵となるまで闘えよ、本日は確実に敵にぶつかるので戦闘法は二、三名を一組となつて突撃、第三中隊の汚名を穢すことなく各兵の覚悟と奮闘を望む」

と前進、決死隊の悲壮なる出で立ちであつた。

見送る兵も「用心してやってくれ、頼むぞ」と言う、生還を期さぬ決意のもと、河崎少尉に「後を宜敷く頼む」と呉々も言い置いて陣頭に向かう。見送る我々にも寂しさを感じずにはおられなかつた。これが最後のうな気がして可哀想でならなかつた。

出動後、残留者が集まり決意を新たに炊事、夕食を用意させ再び作業にかかる。数時間後銃声があわただ

しく響く、やはり敵にぶつかつたようだ。望楼に上がり北の方を見る。大分苦戦のように思われた。三時三十分、突然一羽の伝書鳩が見えたがなかなか箱に入らず漸くして箱に入る。鳩足に用紙が縛つてあり、紙を開くと飯野曹長が、ア―と溜息を漏らした、見れば赤い文字の走り書き「救援頼む」とあり「だから出なければよかつたのに」と曹長が言われた。瞬時我々の心は暗闇にとざされて不安と恐怖を覚えずにはいられなかつた。

機密書類、無線機は一カ所に纏め、望楼、トーチカを作り警戒に万全を期す。第二回目的鳩が来る。内容は変わらぬ悲壮な応援依頼でした。

直ちに救援隊を編成、飯野曹長以下一三名出動につく。悲惨な我が中隊の最後の援兵の征途であつた。

河野少尉より「無理せぬよう状況を判断して行動するよう、中隊の生命がかかっている」と言われ無言のうち決意を新たに誓ひ合つた。「飛んで火に入る夏の虫」の一言で、寂しさの見送りだつた。

北門まで一キロ地点を無言で歩いた。六千余名の敵

陣へ僅かに一四名の小銃隊編成で、誠に無謀な行動であると脳裏を駆けめぐった。

総てを観念し戦友の安否を案じながら漸く北門に付いた。城壁の上から北方を監視すると敵八路军の行動が手に取るようにはつきり見える。約一キロの地点には数千の騎馬隊が活動しているようだ。近接する兵力もなだれのごとく寄せてくる、城門を一〇〇メートルほど出たが戦況を考え引き返す。

六千余名の九、十団正規軍は魚釣り戦法であった。宇賀神中隊が出動するといち早く行動を察知し、今や遅しと待ち伏せしていた。北門より五〇〇メートル行軍した中隊を発見し戦闘状態に入る。敵は先ず退却し奥深く巻き込んで第一線陣地を完全に占領。追撃展開、第二線陣地に移り、戦闘を一段と活発化し砲火を交え原野を圧する。数時間経過すると疾風のごとく背後を突く。八〇〇名の中国保安隊も隊を乱してゼロとなり、ますます八路军の独壇場となる。

宇賀神隊長や指揮官を続けて失い、中隊の指揮は兵がとる悲惨な状況に変化した。敵は逆襲と物量を以つ

て我が隊に肉薄する。八路军の拠点地は四キロ離れた莊里口であった。十五時〇分、死傷者は続出する。中隊は救援し、射って射ちまくり最後の一兵となるまで頑張った。弾薬は尽きるも悲惨な戦闘であった。敵の第九、第一〇団の逆襲と物量を以つて肉薄され、中国保安隊八〇〇名は戦わずして屈服する。ここに中国男児の最後の時期がひしひしと迫ってくる。戦闘の指揮官を失つて兵の心境は如何であったであろうか。

その時は十五時〇分救援の伝書鳩第一信を送る。射って射って射ちまくり渾身を奮って敵を倒した。連続掃射のため弾薬の不足を伝えた。半数以上の犠牲者、最後のご奉公である。お互いに顔を見合わせた。その姿は砂と泥にまみれてただ奥深く光る眼が輝いていた。

無言の奮闘が九時間有余続けられた。警備隊は北門より四キロの地莊里口（小さな部落）に立てこもつて最後の一兵に至るまでと力闘した。八路军といえどもあなどらず、大事をとつて莊里口の全家に火を放つて

全焼させた。負傷者のみ故打つ手もなく、最後の一兵となるまで突撃を敢行したという。

こちら單島の第三中隊の兵舎では十五時三〇分頃、鳩通信の急報により戦況を知る。救援隊を編成し一四名北門より一〇〇メートル出た。その頃の状況は物静かで銃声も単発に聞こえるだけで、敵は今や遅しと待ち受けている気配充分で不気味であった。

飯野曹長は決断を下し、中隊に帰り單島第三中隊の守りに着く。兵は指揮官の命令に従い北門の守りに飯島伍長、竹原上等兵、富田通訳三名を残して中隊に帰る。

北門の守りを一任され、保安隊一〇名を以って「北門を死守せよ、八路軍の攻撃により北門を突破された場合、中隊（二K）の城壁上を通過して帰るよう」厳しい命令であった。

簡単に開門される可能性があるため特に嚴重に見張った。四時三十分から翌日二時三十分まで十時間、夕食も無く勤務に当たった。一度生死を超越した我等の心境は不動の姿であり、第三中隊の名誉にかけて警戒

に当たった。

我等の監視中、西門外の七路軍五〇〇名が協力警戒に当たる。二キロ四方の單島城は山東省切つての繁華街であった。四つ門を有し五〇〇名の保安隊の警戒も誠に風前の灯のように不安を感じられた。

六千有余の八路軍が県域に迫ろうとしている。大隊の五号作戦が展開され、兵力の少ない第三中隊は二〇名少々の極めて危険な状態であり、引揚げた一三名は警戒、望楼の夜間作業の続行で不眠不休の連続であった。正規軍の攻撃が続行されれば完全に県域は陥落の運命にあった。頼り無い協力支那側保安隊。また敵の作戦に乗じた警備隊のため中隊の使命である建設に懸命だった。

十時三十分、突然電話があり三名は北門警備を止め全員中隊に帰るようにと。支那側に代わって飯島伍長、竹原上等兵、富田通訳の三名である。支那側に立哨を一任した時、突然支那側の「誰何」により日本人らしさを確実に認める「本人来米」と叫びながら駆けて来た、私は「誰か」と呼べば御園伍長である。

釣り梯子で引き揚げに努めた、一五メートルもある城壁である。極度の興奮と疲労のため言葉が出ず消息も全然判らないため中隊に連絡した。中隊より飯野曹長等数名駆け来る。本人は相当の深い傷であり、胸部、頭部はやられ、袴下、上衣袴は無く、惨な姿であった。寒気が身にしみる北支の夜空、襦袢一枚の姿、装具一切無く顔面血痕にまみれている。この深い傷で十数メートルの城壁を昇って来た偉大なる精神の保持者である。

開口一番、私に「人間すべからず生きなければいけない」の一言であった。私は現在も伍長の言葉が絶対に忘れられない。

御園伍長はひと先ず中隊に帰り、治療、静養をした。御園伍長が帰った後一時間、私が立哨していたら島野上等兵が帰って来た。例の釣り梯子で引き揚げる、その姿は出勤時と何等変わり無く、無傷で帰って来たのである。しかし、戦友の安否は語らず消息不明であった。皓々たる月が西に没しようとしていた。寒気と空腹、疲労、不安などが身に滲みた。

支那側に警戒を督促し巡察に行く。計画通り密かに中隊に帰り、引き揚げ後速やかに第一線歩哨に立った。第一線の武装は小銃弾一二〇発、手榴弾四発、鉄帽をかぶり、外套なし。立哨時間は二時間、中隊衛兵所より一〇メートル前方の街角である。寒気がひしひしと迫り全身にしみこむ頃、東の空がほんのり明けんとしていた。夜が明ければ我に利ありと確信を以って警戒に就く。

宇賀神中尉、生方曹長、青木伍長は名譽の戦死をとげた。指揮官無く中隊は破滅的段階に陥った。激戦に次ぐ激戦、必死の戦闘である。敵の突撃に陣内は熾烈さを加えて来た。命と頼む弾丸も数えるばかり、なんとる不運か、いよいよ最後の段階に入る。肉弾を以って突撃決行、午後九時に莊里口に突入する。数千人の八路军と入り乱れて数時間の決闘で十数名が名譽の戦死をとげられた。

嗚呼、忠勇なる宇賀神中尉以下二三名の将兵を失い、心から冥福を祈り中隊員一同哀悼の念で一杯であった。

時は昭和十九年一月二十四日、莊里口の戦闘であった。その後も地域の警備に当たり、昭和二十一年四月一日復員した。

現地兵生還者三名だけであった。

北支から中支へ勝部隊 独歩第八 十五大隊の戦闘

山形県 小山田 庄三郎

―出身は山形県の何処ですか、また戦地は何処へ行かれましたか。

私は山形県東根市（現）で、大正十一年十一月三日生れで、昭和十七年徴集、甲種合格でした。

昭和十七年十二月一日、東部第二部隊（近衛歩兵）へ入営。一週間程いて十二月七日夜、東京品川駅を出発。釜山、朝鮮經由、満州―山海関―北支というわけです。

私たちは勝兵団の独立歩兵第八十五大隊要員だった

わけです。旅団司令部は汾陽にあったとのことですが、我が大隊は靈石のそばの東村鎮という所に駐屯していました。第六十九師団司令部は臨汾にありました。

内地での教育はなかったので、我々初年兵は東村鎮で教育を受けたのです。とにかく、北支の冬の真盛り、気温は零下三〇度近い。二八度ぐらいで、直接銃に触れると、指がくっついてしまうので手袋をしなければならぬ。息を吹っかけて温度を上げてからでないと、銃から手が離れない。

一期の教育は、内地の倍の六ヵ月。この間ピンタも張られたが、戦地で自分の命を助けるために止むを得なかったと思っている。初年兵は第八十五大隊に五〇名ぐらい入ったというが、大隊の兵員が、一六〇〇名とのことだから、三分の一の古参兵が内地へ帰ったらしい。初年兵の中には朝鮮から四五名入った。我々との人間関係は悪くなかった。彼等は朝鮮で教育を受けて一緒になったが、頭脳は良く、体力もあり、優秀だった。

教育中は討伐には出ないが、当時の想い出は、教官